



『第11回東邦大学 生命倫理シンポジウム』開催

今回のテーマは『精神疾患と生命』

7月7日(土)、習志野キャンパスの薬学部C館において『東邦大学生命倫理シンポジウム』が開催された。これは各学部の専門性と価値観を学生個々が共有し、より社会に貢献できる人材を育成することを目的として例年実施されている学部横断的な学術集会だ。主な対象は医学部・薬学部・看護学部の4年生と理学部(臨床検査技師課程)の3年生、看護学研究科看護学専攻の学生で、その他の希望者なども加わり、3つの講義室を使った開催となった。

第11回を迎えた今回のテーマは『精神疾患と生命』。3名の専門研究者の講演を聴講し、その内容をもとに参加学生らがグループ討議に臨む。

シンポジウムは10時30分、高松研学長による開会の辞でスタートした。

「本学は全学共通のアイデンティティとして『^{いのち}生命の科学で未来をつなぐ』を掲げており、その流れで立ち上がったこのシンポジウムは、東邦大学としてのアイデンティティを共有することを大きな目的としています。皆さんは現在“必ず答えがある学び”に取り組んでいると思いますが、生命科学には“自ら答えを探しに行く”作業が必要なケースもあります。今日はそれを体験できる貴重な機会です。有意義な時間にしてください」

講演のトップを担ったのは、本学医学部の水野雅文教授による招聘講演『精神疾患と臨床倫理』だ。精神疾患と判断能力、精神科医療の透明性の確保、パートナーリズム(=父権主義。強い立場にある者が、当事者の意思に反して介入・干渉すること)、守秘義務とその解除——。こうした哲学や倫理に関わる難解な課題について、水野教授は極力専門用語を排してわかりやすい言葉で解説していった。

続いて東京医科大学精神医学分野の井上猛主任教授が登場し、特別講演1『精神疾患と自殺』を展開した。うつ病をはじめ統合失調症、アルコール依存症、パーソナリティ障害など自殺の主要危険因子の一つとなるのが精神疾患。井上主任教授はその関連性をていねいに解説した上で薬物療法を行う際の留意点を指摘。さらに自殺予防のため、精神科医・看護師・薬剤師など、医療スタッフが連携チームで関与することの重要性を強調して講演を終えた。

講演聴講後はグループ討議を展開

13時30分より午後の部がスタートした。特別講演2を担当したのは三光舎Sunlight Brain Research Center代表の長嶺敬彦氏。長らく精神疾患の臨床現場で活動してきた専門研究者だ。演題は『あなたのドーパミンは何をしているのか Dopamine Makes Your Behavior!』。長嶺氏は、まずは統合失調症と『ドーパミン仮説』の関連について解説。その後、ES細胞の分化など3つの減少を取り上げ、ドーパミンが人間の行動を制御していることをわかりやすく説明した。さらにサリエンス理論salience、抗精神病薬の副作用の解説と続き、最後に関連の研究・教育の今後に言及して講演を終えた。

内容の濃い3講演の聴講後は、参加学生たちによるグループ討議が行われた。テーマは①精神疾患を持つ人々の生命予後を良好に維持していくために必要なことは何か ②講演

を聴く前と後で精神疾患、精神科医療に対する意識がどのように変化したかの2点だ。3~4名の小グループに分かれ、真剣な表情で仲間とディスカッションを重ねる学生たち。そして50分が経過した後、討議の結果発表が行われた。事前に指定されていた4グループの代表者(医学部・薬学部・看護学・理学部から1名ずつ)が、それぞれの討議結果を参加者全員に向けてプレゼンテーションしていった。プレゼンは聴衆を引き込む話術を駆使するなど、いずれも個性的な内容で、その後の総評で長嶺氏が「100点満点」を出すほどの出来ばえであった。

そして15時50分、薬学部の吉尾隆教授による閉会の辞をもって、この日の全スケジュールが終了した。疲れが見える表情で会場を後にした学生たち。しかし、それは充実感を伴う貴重な学びを経験した後の“快い疲労”であったはずだ。



開会の辞を述べる高松 研学長



医学部・水野 雅文教授



東京医科大学精神医学分野・井上 猛主任教授



三光舎Sunlight Brain Research Center代表の長嶺 敬彦氏



質疑応答で積極的に質問する学生



グループ討議の様子



グループ討議発表の様子①



グループ討議発表の様子②